

ホトトギス

昭和二十二年三月二十八日出版  
昭和二十二年九月一日発行  
第一〇二二号  
第一〇二二号

# ホトトギス

九月号



## 風雅の小筥（五十五）

廣太郎

先月は汀子名誉主宰の追悼号という事でも無いが、このコーナーを休載させて頂いた。何卒お許し下さい。

七月号では、ホトトギス社が丸ビルの七五三区に事務所を構えて、昭和六十四年一月七日に昭和天皇が崩御あそばされた事を書いたが、その後この部屋でホトトギス社の仕事は続き、私も毎日出社する日は続いた。この時は、ここから別の場所に移転する事は全く考えていなかったという記憶があるが、平成に入り、二年の春頃、ホトトギス社に突然オーナー会社のある。実はこの話は本誌平成三年七月号から山会の文章のコーナーで拙文「移転」と題して暫く連載されていて、お持ちの方は是非もう一度お読み頂きたい。又お読みになった事の無い方でも芦屋の虚子記念文学館や、現在のホトトギス社にもバックナンバーが揃っているのです、お読み頂く事は可能である。何れにせよ、ホトトギス社の事務所は丸ビル七五三に移ってから約四半世紀後に移転するのである。ただ、移転といっても、同じ丸ビルの中であった。部屋番号は五五三区である。番号から想像出来るように階はそれまでの七階から五階になった。そして下二桁でも判る通り部屋の位置は七五三区と変わらず、そのまま階がスライドしてきたような移転となったのである。移転の準備は勿論私も含め社員の仕事だが、二十五年の歳月を経た事務所からは、虚子の自筆の半切が本棚の裏に落ちていたり、ちよつとしたお宝も発見出来たのであった。

# 廣太郎句帳 廣太郎

令和三年九月一日 カトリック新聞選者吟

新涼の雨に大地の目覚めゆく

九月二日 蕉心会通信句会

又降られ二百十日の雨男  
母の声受話器はみ出す秋思かな  
生温き風の存問秋暑し  
七草を数へ木道尽きるまで  
露の袖触れて棺の閉ぢらるる  
夜業終へ靴音高きアスファルト  
夜の闇染めて都心の鉦叩  
秋の蟬何時しか絶えて季の移る  
震災忌街騒空に吸はれゆく  
長き夜の長き電話の愁思かな

九月四日 菅屋ホトギス会

秋出水床下といふ異界かな  
枝豆に虚子の銘酒といふ矜持  
伯母逝きて忘れ扇となりゆけり

九月五日 野分会菅屋例会

落日をすくとんと消して秋の海  
蕎麦の花羽音を白く染め上げて  
甲斐駒の駆け抜けし里蕎麦の花  
秋の海三笠は永遠に動かざる

九月五日 青嵐会菅屋例会

音立てずコルク抜かれてより夜食  
百句詠み終へてよりとる夜食かな  
夜食とる君には何時も避けられて

初雪の富士と言はれてみればまあ

九月八日 NHK文化センター

新月の空木屋に続べられて  
鉦叩都心に闇を引き寄せて  
ヴィオロンの調へのアアシス昼の虫  
街路樹は都市のオアシス昼の虫  
長き夜や母との会話続かざる

九月九日 土筆会選者吟

桔梗活け明智の里の矜持かな  
廳風禍庭の春秋奪ひゆく  
夜食とる一升瓶を真ん中に  
鬼の棲む山和ませて桔梗咲く  
廳風禍風鋭角に鈍角に

九月十日 六甲会

教会の鉄扉閉ざされ蚯蚓鳴く  
販売機復活の館蚯蚓鳴く  
草の花星のシャワーを浴びし朝  
フルトヴェングラーの墓標草の花  
もう誰も弾かぬピアノや蚯蚓鳴く  
墓碑銘は海軍大佐草の花  
頑に拒む入院蚯蚓鳴く

九月十六日 登高会

黙深く無月に酌んでゐる二人  
鈴虫や闇金色に染め上げて  
翹立ててより鈴虫のプレリユード  
タワいの灯消えて無月の仄明り  
作務衣着て小粋に萩の主かな  
萩の宿を小粋に主は七代目

九月十七日 廣邦会

秋蝶の虚空まさぐる白さかな

九月十九日 青嵐会東京例会選者吟

何もかも忘れさやけく老いし母  
秋蝶に咲くもの色を配りゆく  
秋扇閉ぢるより風色変る  
冷やかにモーツァルトのト短調  
鱗雲空の結界解きゆく  
曼珠沙華母との会話繋がらず  
九月十九日 野分会東京例会 川口利美氏飛び入り参加

九月十九日 野分会東京例会 川口利美氏飛び入り参加

艦沈め魂鎮め秋の海  
黒々と水尾曳く空母秋の海  
アルプスに白き妖精蕎麦の花  
九月二十一日 「円虹」色紙揮毫

大冬木明日を信じて鎮もれる

九月二十二日 目黒学園句会

羽音皆松虫草に来て止まる  
黒々と丹波の矜持月見豆  
松虫草風に明かされゆく色香  
枝豆を枝ごと茹でて寿  
九月二十六日 北信最ホトギス俳句大行モト句会

看取りてふ六百粒の露の旅  
鉦叩都心の夜に菜流れ  
九月二十七日 カトリック新聞選者吟  
秋蝶の繯れもつれて溶けゆけり  
九月二十八日 若水句会選者吟

立山を白銀に染め蕎麦の花  
秋の海水平線を遠ざけて  
秋燕軒一巡りして消ゆる

# 雑詠

## 廣太郎 選

その辺をすこし片附け夏に入る  
 虚子像と汀子の遺影夏に入る  
 汀子亡く淋しき夏に入りにつけり  
 上梓の日待たれず永久の春眠に  
 春眠のつづきを虚子に抱かれて  
 春愁に勝る悲しみありて泣く  
 師を偲ぶ女将の泪あたたかし  
 全山の花に抱かれ汀子句碑  
 墨痕にしのお面影花の宿  
 松臚芦屋の浜は汀子晴  
 あたたかや師はそれぞれの胸に生き  
 うつし糸の汀子麗し花館  
 うつろひて人待たずして花は葉に  
 葉桜となりてみ吉野常の日へ  
 亀鳴き止まずレクイエム鳴り止まず  
 春の雲おほどかに瀬戸渡りゆく  
 囀のくすぐつてゐる夢の端  
 行春や能楽堂へ川伝ひ

東京 今井千鶴子

同

相模原 木村享史

同

西宮 田中祥子

同

奈良 古賀しづれ

同

神戸 山西商平

同

同

同

同

同

同

同

同

同

初音聞く開け放ちたる玄関に  
 踏み入りて花見失ふ花の山  
 満開に下界隠れて花の山  
 庵小さし人なほ小さし遅桜  
 庵訪ふ女人ばかりやうらけし  
 吉野山つひの落花をふりしぼり  
 入学の子の気合とも気負ひとも  
 海光に丈となりゆく松の芯  
 亀鳴くやお伽の国のやうな街  
 遠目にも待ちぬし如き余花に遇ふ  
 山脈の万緑を突つ切つて旅  
 立ち向ふ一事控へて更衣  
 ピサンキの聖水の粒復活祭  
 新しき眼鏡躑躅白極む  
 富士山を隠す霞も日本一  
 序の舞の誘ふ気韻薪能  
 小鼓に篝火猛る薪能  
 一笛の闇を貫く薪能  
 戦場となりたる空を鳥帰る  
 無辜の死の累累として花の冷  
 入学の制服の子がゐて平和  
 憂きことは無し春光の野に出れば  
 村は皆闇に沈みて亀の鳴く  
 亀鳴くや世に文学のあるかぎり

龍ヶ崎 今橋真理子

同

同

東京 田丸千種

同

同

神戸 玉手のり子

同

同

長岡 安原 葉

同

同

大阪 酒井湧水

同

同

神戸 涌羅由美

同

同

熊本 岩岡中正

同

同

袋井 湖東紀子

同

同

同

## 雑詠句評（八月号より）

### 師の庭のミモザ静かに黄を放つ 芦屋 黒川悦子

師の庭は汀子先生のご自宅の庭の事だと思ふ。早春の庭にミモザが香りを放って咲いている。

汀子先生のご自宅の庭からは、虚子記念文学館へと抜けられる小さな門がある。句会などがある時はよくその門からご出席されていた。庭には色々な植物が植えられ、季節ごとにとりどりの花を咲かせていた。今はミモザが主役だがそのミモザさえ主を偲ぶかのように静かに黄を放っている。（龍雄）

恐らく汀子邸の玄関を入ったすぐ横にあるミモザであろう。春になると見事に黄色の色を鮮やかに放ち見る人の目を楽しませてくれるが、二月に帰天した汀子自身はこの花を見る事が出来なかつたのである。しみじみとした回顧である。（廣太郎）

### 来ぬと知りつつも待ちたる雛の席 西宮 本郷桂子

「雛の席」に着くべき人は、単なる客ではなく、その場にいる

のが当然か、あるいは、いて欲しい人なのであろう。来られぬ理由は病気か、あるいは亡くなられたか、筆者には何となく後者のように思われるが、とにかく、その人の為の席だけは設えてあるのである。どことなく、物語めいたところが、この句の味わいどころだろう。（公次）

雛が飾られている部屋に居られる作者である。その持ち主はもう永遠にこの雛に来る事はない故人なのである。それでも遺愛の雛は飾られていて、作者はその持ち主を回顧している。作者の気が痛々しいほどに伝わってくる。（廣太郎）

### ともに賞づはずでありしに初桜 神戸 田中由子

その方と一緒に愛でるはずであった初桜。それを一人で仰いでいるのである。もちろん、その方とは汀子先生に他ならない。「くつろぎの旅」の吉野での数々の思い出が蘇るのであろう。（純也）

汀子に対する悼句が続くが、毎年桜の花を見に吉野山と一緒に行かれている作者である。今年も花の便りが届いたが、例年のように訪れる事は叶わないのである。季題の優雅さが、却って悼む心を如実に表現している。（廣太郎）

### 御快癒を信じ春待ちのみしも夢 長岡 安原 葉

一読して稲畑汀子先生への想いを句にしたものであると理解出来る。作者の汀子先生への想いは一方ならぬものであり、二月二十七日に帰天されたことを知らされて、誰よりも哀しみ深かったことであろう。快癒を信じて待つておったのに、それが夢となって消えてしまったのであるから。

汀子先生がご逝去されたことの哀しみはホトトギス同門全員の哀しみであるが、同人会長としての作者の恙なきことも祈らずにはいられないでいる。(紀元)

慕う人が重い病に臥せていると、この上もなく心配になるのと同時にその人の快癒をひたすら祈るのが人情である。ただ、それが叶わなかった時の悲しみは一入であろう。「夢」という一語に作者の気持が表れている。(廣太郎)

### 汀子師の言葉厳しくあたたかし 香川 三宅久美子

誰よりも俳句を愛し、俳句に愛された汀子先生。

正しい俳句を守り伝えようとなさる時の先生の言葉は強く厳しいもの、しかし、その厳しさは俳句に対して、あるいは俳句をたしなむ人々に対しての優しさが根底にあったと思う。

汀子先生と言葉を交した者、汀子先生の心に触れた者は、百人が百人、千人が千人自然と納得する一句である。

あらためまして汀子先生のご冥福をお祈り致します。(しげ人)

具体的な名前が出ているが、作者も汀子に直接手解きを受け、この道をひたすら歩んでいる。生前の汀子の言葉を思い出して故人を偲んでいるのである。平明な表現であるからこそその気持の昂りが垣間見られる。(廣太郎)

### 御空より眺む吉野の花いかに 神戸 涌羅由美

汀子先生への追悼句である。毎年の行事として吉野の桜符をされ、句座を楽しんでこられた汀子先生。吉野の素晴らしい桜の句をたくさんに遺された。正に吉野の桜のような華やかな師のお姿が思い出される。桜の季節を見ずに逝ってしまった汀子先生を偲び、天上からの桜の景色はいかがですかという師への呼びかけが哀しく伝わってくる。(しぐれ)

例年開催していた「吉野くつろぎの旅」は、奈良県吉野山の桜を愛でる会で、汀子自身主催者として楽しみにしていた。今この世の生活を終え、天国からこの花を見ているという作者の信仰深い表現が神々しい。(廣太郎)